31) DENTAL NEWS LETTER の書誌学，および当時の米国歯科医学発達の情況（その2）1850年代後半について

Studies on the Bibliography of the Dental News Letter and the Circumstances of American Dentistry (Part 2) During the Late 1850s

東京歯科大学　森山徳長，○新井　勉

Norinaga Moriyama and Tsutomu Arai, *Tokyo Dental College*

前回総会では，前巻6巻迄の雑誌の書誌学的構成主要な記事を通覧して，当時東部で行われていた歯科医療の実情を大凡報告した．後半では，前半から寄稿を続けていたJ. D. Whiteが正式に編集者となり誌面の量質共に一段と向上した．7巻1853年10月，1854年1, 4, 7月から12巻1859年7月まで規則正しく季刊誌として発行され，月刊誌Dental Cosmosに引継移行した．

この期間では前半と同様に，主筆J. D. Whiteが原著者として毎号のように健筆を振っているが，前半に登場したTownsent, Flagg, Bealeらも屢々投稿している外に，Chapin A. Harris, Robert Arthur, James E. Garretsonなどの著名な教授陣の執筆論文が，後半では多数顔を見せているのは見逃せない．

いづれにせよ，歯科製造会社のPRに始まった本誌も4•5巻位には学術雑誌を志向していることがはっきり見てとれる．J. D. Whiteの歯髄処置を視野に入れた充填法の論文は，Jefferson Medical CollegeへのM. D.の学位請求論文として6巻から連載されている．

その連載第2篇が7巻1号に載った．その他に主筆として，“Notes from my Case Book”あるいは，“Extracts from an Introductory Lecture”のタイトルで症例報告を7巻以降各巻2〜5回程度執筆している．その他に“Irregularities of the Teeth”歯列不正の矯正法について，各巻に寄稿しているのが目立つ．その他にも臨床的なテーマの論文も多数書いている．

7巻の巻頭にはE. Townsentが「歯科のパテント」について書き，又フィラデルフィア歯科医学校の卒業式辞や，「Sponge gold」も書いている．

また著名な教授としては，Chapin Harrisは「急性歯槽骨膜炎」の論文を載せた．Robert Arthurは「歯髄の異常を伴う齲蝕の治療法」，Buckinghamは「歯科用合金術」をそれぞれ掲載した．

8巻ではArthurは「Sponge gold」「金箔の新しい治療法」「卒業式辞」を，Garretsonは“エーテル問題”を2・3号に連続掲載した．

主筆WhiteはNotes from my Case Book 1篇の外に“塩酸亜鉛セメント”，“歯牙の神経痛”，“象牙質の吸収”，“歯槽膿瘍の治療”，“破壊され易い歯への充填”の6篇を書いているし，論説欄でも口蓋吸着盤のことやスポンジゴールド，またHarris著歯科用語辞典につき述べている．

9巻では，第1号巻頭にAmerican Society of Dental Surgeons（1885. 5. 8シンシナチ市での決議を受けて）のこの年度第2回の総会議事録が24頁にわたり掲載された（ちなみに会長はE. Townsendで，Bonsall, Arthur, Durning, Parmly, S. P. Miller, J. Allen, Goddard, J. S. Clark, C. O. Coneらが出席・講演している）．この会議はフィラデルフィア歯科医学校で1855年8月1日より4日まで行われた．

この巻でもGarretsonがエーテル問題について引続いて2回にわたり述べている他に，Dental Hygineについて10頁にわたり寄稿しているのが注目される．

主筆J. D. WhiteがIntroductory Lectureからの抜粋の他，“矯正について”，“軟らかい食物について”，“顔面の瘻孔”等について述べ，更に“充填材としてのアマルガム”について寄稿した．同じくアマルガムにつきTownsendも投稿している．この巻から他誌，歯科文献，また医学的参考文献の抄録を掲載することを始めている．

HarrisのPrinciples and Practice of Dental Surgeryの書評も見える．

10巻ではE. Townsendが“職業上の報酬”“卒

業式式辞”および“困難を克服する簡単な方法”を載せ，Arthur の“金箔充填改良法”についての T. D. Thurman の寄稿や，論説欄でも取り上げられているのが目立つ．

J. D. White はアマルガムについて書き，矯正については 3 回論考を掲載し，齲食と骨の壊死について書いている．Buckingham の補綴学記事もある．

この巻では他誌の歯科文献，医学雑誌の抄録が 3 号にわたり取り上げられている．また歯科団体の記事，議事録が多く取り上げられ特に American Dental Convention の動きが注目される．

また英国における歯科団体の動向についても報道している．

11 巻では American Dental Convention の報告が巻頭に出て来る．また英国の歯科団体と雑誌について報告されている．

Townsend がアマルガム充填を行う人への忠告を 2 回寄稿している．

主筆は症例報告 4 編と矯正 1 編と健筆を奮い，抄録集は 3 号全部に出し，J. H. McQuillen は原著論文も出し，歯科雑誌の抄録を担当した．

12 巻でも同様な編集取扱がとられ，American Dental Convention と Western Dental Society 記事で始め，歯科・医科雑誌の抄録等が 3 回掲載され，主筆 J. D. White の論文は合計 6 編に上る．

興味深いのは高山紀斎の師 D. Van Denburgh がアルミニューム床について 2 回寄稿していること，および J. Foster Flagg と J. H. McQuillen が歯細管を強固にすることにより齲食が予防できる，とできないという反対の論文を 1 号 2 号に出していることである．

その他 Elisha Townsend の死亡記事と，追悼記事が出ている．

最終号論説で 1959 年 9 月より月刊誌 Dental Cosmos に移行し終刊することを予告している．